



## インド・デリーを訪ねて

国際東アジア研究センター主任研究員 今井 健一

インド訪問は2回目となる。といっても、初めてのインド訪問は9年前の2002年、それもわずか3日間の滞在であり、記憶に残っているのは、デリーに在るインド・ハビタット・センター (India Habitat Centre) の会議室で研究発表をしたこと、市内見学のため車をチャーターする際に料金交渉に手間取った程度のことしかない。よって、今回の7日間に及ぶ滞在が、初めてのインド訪問といえる。滞在期間は2011年10月27日から11月2日まで、滞在先は首都デリーである。この海外便りでは、インド滞在中に感じたことや訪れた場所などを紹介するとともに、今回の訪問目的となった調査の内容についてもふれたいと思う。

### 1. 市内の移動はオートリクシャーが便利

海外の目的地に着いて、入国審査を済ませ、ベルトコンベアから流れてくる自分の荷物を確保した後、まず、しなければならない事は、現地通貨への両替とホテルまでの足の確保である。現地通貨への両替は特に問題はないのだが、足の確保の方は、途上国では、まして初めての訪問国では、ちよっぴり頭痛の種となる。しかし、インディラ・ガンディー国際空港には、“プリペイドタクシー”のシステム<sup>(注1)</sup>があったお蔭で、タクシー・ドライバーの客引きに狼狽えることもなく、妥当な料金であるのか否かを思案することもなく、宿泊先のホテルまでスムーズに到着することができた。滞在期間中、タクシーを利用したのは、この時と帰国の際のホテルから空港までだけである。理由

は、オートリクシャー（三輪タクシー）の便利さとドライバー観察に嵌まってしまったからである。

デリー中心街より8kmほど離れた道路沿いにこぢんまりと建つ3星ホテル（全30部屋）に夜無事チェックインし、翌日、最初の訪問先であるエネルギー資源研究所（TERI：The Energy and Resources Institute）へとオートリクシャーにて向かった。

今回のインド訪問の目的は、北九州市より研究助成金<sup>(注2)</sup>をえて実施している「インドの都市内部および都市部と農村部の間における住環境格差についての研究」の一環として、インド農村部における自然エネルギーによる電化促進の取り組みを調査することである。TERIは、インド・デリーに拠点を置く研究機関で、スタッフ数は約900名、TERI総裁は、アメリカ元副大統領ゴア氏とともに2008年ノーベル平和賞を受賞した、気候変動に関する政府間パネル（IPCC：Intergovernmental Panel on Climate Change）の議長を務めるラジェンドラ・パチャウリ氏である。このTERIが太陽光エネルギーによるインド農村部電化促進プログラム<sup>(注3)</sup>を実施しているとの情報をえて、今回の視察を依頼したわけである。

TERIでの打ち合わせを終え、再びオートリクシャーをつかまえてホテルへと戻った。市内の移動方法としては、地下鉄、タクシー、バス、オートリクシャーがあるのだが、自分の予想に反して、オートリクシャーに嵌ってしまったのにはいくつか理由がある。1つは、その台数の多さゆえの便利さである。ボディカラーが緑と黄色で目立つ



オートリクシャーの後部座席から



市内中心部を走るオートリクシャー

というせいもあるだろうが、市内を流しているオートリクシャーの方がタクシーよりも圧倒的に多いような印象を受ける。また、ホテルなど主だった建物の前では、多くのオートリクシャーが客待ちをしているのでつかまえやすい。もう1つは、ドライバーのちょっとした人間性が垣間みえることである。何回か乗るにつれて、いろいろなタイプのドライバーがいること、そしてどのドライバーもオートリクシャーのプロであることがわかってきた。あるドライバーは路上脇におもむろに止めるとココナッツジュースを屋台で注文し、私にも“お前も飲むか?”というような合図をしてくれた。また、宿泊先のホテルを間違えてしまった若いドライバーは、いろいろな人に道を聞いて、汗だくとなって私を無事ホテルまで連れていってくれると、ニヤッと笑って料金を受けとっていた。タクシーでは、おそらくこういう経験をするのはなかったであろうと思う。

## 2. インド農村部の電気事情

今回のインド訪問の最大の目的である自然エネルギーを利用した農村部電化促進プログラムの現地調査のため、TERIのスタッフとともにデリーより車で2時間のグルガオ市（City of Gurgaon）からさらに車で1時間かかる農村へと向かった。グルガオ市からは、現地のNGOであるIRRAD（Institute of Rural Research and Development）のスタッフが案内役として同行してくれた。訪問したのは約40世帯が暮らす村である。この村では、つい最近まで無電化状態で家々は灯油を入れた瓶に火をともして灯り<sup>(注4)</sup>をえていたとのことであった。しかし、新たに導入された太陽光エネルギーによる電気ランプのお蔭で生活は一変したと村の人たちは話してくれた。村の中心となる場所に建てられた太陽光発電ステーション（ステーションといっても、屋根に設置された太陽光パネルの広さは畳2畳分ほど）で充電可能な電気ランプは各家庭に貸与さ



灯油を入れた瓶からとる灯り



太陽光エネルギーによるランプ



訪れた村の子供たちとバッファロー



村の人達と

れており、このステーションで毎日充電されるという極めて簡単な仕組みである。しかし、おかげで子供達は、夜、家で勉強ができるようになり、昼間農作業を手伝えるようになった。また、女性たちは、明るい灯りの下で、黒煙に悩まされずに料理ができるようになった。そして家で夜、読書や仕事もできるようになったとのことであった。黒煙を出す灯油瓶から太陽光で充電されたランプに替わったことが村の人々の生活を大きく変えている。

このインドで、自然エネルギーがどのように人々の生活を変えているのかにより関心が強まった今回のインド訪問であった。

## 注

(注1) インディラ・ガンディー国際空港から市内のホ

テルまでは、ほぼ一律料金の320ルピー(約480円)で、料金も支払カウンターに書かれている。

(注2) 正式名称は「学術・研究振興事業調査研究助成金」

(注3) このプログラムは“Lighting for a Billion Lives”という名称で、インドだけでなくアフリカにおいても展開されている。

(注4) 灯油を入れた瓶の芯に火をつけるとすぐに黒い煙がレンガ造りの小さな家の中に広がった。健康に良くないし、火事の危険もあり、そして灯りとしても暗い。